



考
え
マ
ル

いつまでたっても
進歩のない文化のために。

第八十二回 『台北プライベートアイ』と
「松本がこうなった」理由

弦楽器イルカ  ⇔ 友人

目次

第八十二回『台北プライベートアイ』と「松本がこうなった」理由～U から G へ～	1
第八十二回『台北プライベートアイ』と「松本がこうなった」理由～G から U へ～	3
第八十二回『台北プライベートアイ』と「松本がこうなった」理由～U から G へ～	11

第八十二回『台北プライベートアイ』と「松本がこうなった」理由～U から G へ～

最近、『台北プライベートアイ』という小説を読んだ。台湾繋がりで買ったんだが、それ以外でも面白かった。主人公と作者は演劇学部の大学教授で、探偵業を始めるんだけど、半分以上の文章が、世の中に対するあーだこーだなんだよね。それがウマシカみみたいに、軽快でエスプリが効いててすごく良かった。

ブッダとアッラーとキリストを比較したり、その三者をコーヒー、ミルク、砂糖が3 in 1 で入ったインスタントコーヒーに例えたりとか。

何が言いたいかって、G もそんな1人語りが多い探偵小説を書いてみたらどうだろうか？

さらに、ふと表紙に惹かれて買った『ザリガニの鳴くところ』がめちゃくちゃ良かった。2019年と2000年にアメリカで一番売れた本らしい。

1960年代のアメリカの田舎の湿地帯に家族に見放されて一人で生きる少女の話。ど田舎の村からも離れた人が忌み嫌う土地の、動物とか植物とかの自然の細かい描写が美しいんだよ。翻訳も素晴らしい。

二つの時間軸で構成されてて、ミステリー要素もあって、死体が発見された事件の69年に、少女の成長の時間軸が追いつく構成。これが不吉な時間が迫ってくる演出になっている。

でもこの小説を上手く表現できない。これは湿地文学というジャンルというのが、一番適切な表現かも。

『ザリガニ～』がすごいのはエンタメのミステリー要素があるとはいえ、湿地文学というピュアな文学がアメリカみたいな邪悪な国でベストセラーになるところだよ。日本では純粋なエンタメミステリーばかり売れてるから、こういう文学みたいな作品は流行らないからね。

『ザリガニ～』は映画化もされたけど、やっぱり文字の芸術は今の時代でも輝くものがあるし、哲学より可能性が残ってると思った。

何を見て聞いたかどう感じたかは、映像で表現するよりも主観を結晶させた文章の方がダイレクトに主観に入ってくる。植物とか両生類の名前はさっぱりわからなかったけど。

映像はどうしても外から眺める位置になってしまう。そのわずかなズレを妥協しないのが文学だと思う。共に湿地を感じ、共に湿地の時間を生きる感覚は文章じゃないと表せない。この湿地の世界観そのものがミステリーの最後のカギになっているのもすごい。ネタバレになるから言わないけど。

まあよかったから映画も見てみるけどね。湿地がどんなものか、映像のサポートがあればより理解できるし。

『ザリガニの鳴くところ』の映画が、Amazon prime にあったので観てみた。良い作品なんだと思うけど、小説が良すぎるので、結果的に残念だった。

残念っぷりの象徴的なシーンがあって、村の子供達がビーチで男女楽しく遊んでいるところを、主人公の湿地の少女が木陰から観て羨ましがっているシーンがあるんだけど、小説では明記はされてないけど、少なくとも 50 メートルくらい離れた場所をイメージしてた。それが映画では 3 メートルくらいの隣で、あまりにも近くて吹き出してしまったよ。コントかよって裏切られた感がすごかった。

あとは、湿地の少女もその家も、近くの村もみんな貧乏でボロボロの服と村を、イメージしてたのに、全部ピカピカだった。別荘に遊びにきた令嬢かよ！ ってなった。

それ以外はまあまあな感じ。まあ、少なくとも映画は先に見ない方がいい。ネタバレしない方がいいし、後で映画を見てイメージの突き合わせをすると面白い。映画監督は作品をまとめ上げたのは偉いが、感性が弱い気がする。映画の限界でもあり、やっぱり小説がまだ芸術として十分存在価値がある証明だとわかる。

原作も良くて映画やドラマも良い作品って少ないけど、ジブリとか少し古いけど、のだめカンタービレくらいかな。後者は上野樹里が天才すぎただけかもしれないけど。



第八十二回『台北プライベートアイ』と「松本がこうなった」理由～G から U へ～

すでにネタバレですが何か？ Uがのだめ観てんのは意外だわ。

『台北プライベートアイ』は面白かったね。ただ、物語って記憶に残りにくいんだよね。ウマシカな俺はすでにうろ覚え。

読みながら考えたのは、いわゆる昭和のおかんが（まさに某コントのように）強引におせっ介してくるのは、なくさない方がいい文化なのかなってこと。

疎んじられても介入することの難しさや、尊重しつつ受け入れを拒む幅について考えたよ。

この前段が伏線になるように今回書くつもりだから、ちょっと先に結論を書くよ。

遺伝子が後世まで生き残るために、植物から動物まで多種多様な生命が生まれ、どれかが生き延びて更に地球外まで拡散するような戦略が（結果的にでも）取られて、今に至る。遺伝子さえ残れば、どの種が減ぼうがいい仕組みで生命はできると俺は思う。人類なんて遺伝子さえ残るならいつ滅んでも不思議じゃない。

そしていつも思うけど、「俺が正しい」って人類が俺ばっかになったら、熊に襲われて国が亡ぶよ。熊を殺す人とコンピュータを作る人、肉体労働する人と知的労働する人、暴力的な人とおとなしい人、がめつい人とおおらかな人、いろんな幅があるから文明が繁栄する。

力が支配する場面と知性が支配する場面があり、それぞれの場面を経て遺伝子の幅も広がり、環境の困難さに適応できるような多様性が生まれる。

別に俺がプライドに溺れて滅ぶのは勝手だけど、生命は基本的に生きながらえ繁殖しようとするから、誰も俺と共倒れなんてしたくない。

だから、21世紀は幅の時代なんだよ。村上春樹でさえ自分の定規で距離を測りながらおそろおそろ初めての小説を書き始めたように、ここからここまでなら許容される幅について、その幅を逸脱したらバランスを崩してしまう危険性について、みんなの定規の目盛りを少しでも合わせるために歩み寄るのが、21世紀の学問の意義だ。

叩き合い排除するんじゃなくて、妥協して共存するための目盛り。ネットがあることで、各自の目盛りはより可視化しやすくなった。AIも人類の目盛りの調整に一役買うだろう。

最終的にはこの目盛りが、宗教を駆逐する新しい指針になるはずだ。

さて、こっからぶっとんで松本の笑いについて総括するんだけど、最後に前段の結論まできれいに伏線回収するのがさすがウマシカだよね。先に言っときます。

「トカゲのおっさん」ってコントが、『ごっつ〜』最後の頃にあった。

このコントはその長さや哀愁がすごかったのもあるけど、一番の面白さはそこじゃない。アドリブコントの極限が垣間見えた部分だ。

(これ書くにあたっていろいろ調べ直したけど、どこが面白かったのか、構図のどこをずらしてどこをずらさなかったのか、笑いについてテクニカルな分析が、たぶん人類全体で2世紀半くらい遅れてるね。『藪の中』の回と一緒に。学者がちゃんと仕事してないと思う。笑いを細かく読解することは無粋だから本当はしたくないが、今回は文化の進歩のために仕方なくやります)

長尺のアドリブコントを何話もやっていくうちに、コント慣れしてるはずの演者たちがそのシュールさに飲み込まれていく瞬間がある。

中年の蜥蜴人に怒った人間のおっさんが、演技を通り越して真剣に怒鳴る「このヤモリが！」という無自覚な怒声に、演者一同、吹き出してしまう。なぜか。

まず第一に、「このトカゲが！」でも成立するはずだ。だって人間のほうがトカゲより上って差別意識がどっかにあるからだ。もちろん現実なら、人間とトカゲを比べて怒鳴る場面なんてほぼないから、ここで初めて自分もトカゲを人間より下に差別していることを発見する。

ただ、この人間のおっさんは「このトカゲが！」ではなく「このヤモリが！」と怒鳴った。なぜか。

それは本気の怒りをぶつけたかったから。「このトカゲが！」では弱いと感じ、もっと強い罵声でなじりたかったから。そこで咄嗟に出た悪口が、「このヤモリが！」だった。

その瞬間、全員が気づく。

「ヤモリよりトカゲの方が上なの？」「このおっさん、バカなの？」「トカゲに向かって本気で怒鳴る人いる？」「そもそもトカゲのおっさんって何？」

このコントはこの後、何話も展開して、女装した男とトカゲの被り物をした男の気味の悪い接吻の場面もある。そのシュールさに飲み込まれた視聴者は、理性ではおぞましさを感じながらも、感情は熱い愛の営みに揺さぶられている。目では気色の悪い場面を観ているのに、脳内でそれが感動的な何かに塗り替えられていく。

他にも、子どもをバカにしながら媚びるしかないトカゲダンスの悲哀とか、笑いながら泣くような、珍妙な感覚だった。

俺にとって、松本のピークはここだった。その後も数年間、面白さは持続したけど、これ以上の笑いや驚きを生むことはなかった。なぜか。

松本自身が、自分の笑いを読解・言語化できなかったからだ。

前にも書いたけど、天性の才能だけでは打てなくなった打者が頭を使って再生する野村工場のように、若い才能と感覚だけで取っていた笑いに限界が来た。しかし、自分の笑いを読解・言語化できなかったから、なぜ自分が面白いのか感覚でしかわかっていなかったから、松本はその後、新しい笑いを生み出せなかった。

新しい笑いを生み出せないまま、視聴者側は松本の笑いに慣れていった。松本は自分で自分の笑いを食いつぶしていった。

だが、この類の笑いを読解・言語化した人間もいる。少なくともこの「トカゲのおっさん」に似た映画を、俺は二つ知っている。

それが『キス我慢〜』と『Everything Everywhere All at Once』だ。

松本が映画を撮ると聞いたとき、「トカゲのおっさん」のテイストを長編化するんだと思った人間は俺だけじゃなかった。実際、『大日本人』の前半はまさにそうだった。

それが後半失速するのは、松本自身が「トカゲのおっさん」で起こった奇跡の化学反応の意味を理解していなかったからだ。

壮大なアドリブコントである『キス我慢〜』は、「トカゲのおっさん」のパクリだと、佐久間さんと対談しても松本は全く気付かなかった。というか、パクられているにも関わらず佐久間さん自体をほとんど知らなかった。(もちろん『キス我慢〜』は単なるパクリではなく、より洗練と努力を重ねられた奇跡の結晶だと、佐久間さんの名誉のために一応言っておく)

一方、『Everything Everywhere All at Once』はアドリブではないが、バカバカしさと感動が同時にねじ込まれる映画だった。

さて、ここまで読めばそろそろ、松本がこうなった「致命的な原因」に気づく頃だ。何かがおかしい。

人間は嬉しければ笑うし、くすぐられても笑う。他者の無様さや自己の優越性を認識しても笑う。

ただ芸人が生む笑いはそれだけではなく、構図のズレを認識させるテクニカルな笑いだ。

縦軸に強弱があり、横軸に意味がある。

笑う対象が持つ要素を一つ一つ抜き出し、どの要素をズラし、どの要素をズラさないかを決める。

ものすごくズレているのに、なぜか合っている。その構図のズレの量が、笑いの量を

決める。

そして新しい笑いを生み出すためには、常にアップデートされる世界の多様な事象について理解しインプットし続ける必要がある。あらゆる事象は一定ではなく、人間の数だけ理解に幅がある。

その事象には今どんな要素があるか理解・更新し、さらに他者の心の中にどう印象付けられているかを想像し距離を測る必要がある。

つまりテクニカルな笑いは松本のような天才よりも、むしろA Iの方が得意な可能性が高い。もし今、まだA Iが笑いを生み出すことに未熟だとすれば、それはA Iの責任というより、プログラミングする人間の方が笑いの構造を理解してない設計ミスからだろう。

たとえば松本なら、金髪、筋肉、タンクトップ、怖そう、偉そう、ゴリラ、キモイ、という要素が思い浮かぶ。

ただ古い信者からしたら、天才、芸人、神、面白い、という要素もあるだろう。

村度芸人ならこれらの要素から、「天才キモゴリラ」とか「面白タンクトップ」とかの生ぬるいあだ名をつけるだろう。でも俺にとってはただの「オモシロ風の筋肉」だ。オモシロっぽい雰囲気は出すが、実際は筋肉しか出さないからだ。

一方、佐久間さんや東野みたいなエンタメ変態は、絶えずインプットし続けているモンスターだ。

「某ラジオの帝王」も、無駄な外出をしたり全録を視聴したり盆正月も休みなくインプットをやめない。

その結果が、一体何を生み出すのか。または逆に、古い理解をアップデートしないまま古い笑いで止まった芸人がどうなるのか。

一般社会でも先輩が後輩を誘って飲みに行くのさえ、パワハラかどうか気を遣う時代だ。「某ラジオの帝王」はパワハラで降板した自身の苦い経験から、後輩を誘って遊ぶことさえ躊躇する。

だからこの正月、「某ラジオの帝王」は暇な後輩芸人から誘ってもらい、桃鉄とマリパをやり、若い頃はあんなに楽しかったゲームが中年にとってはただ虚しいだけのゲー無だと痛感してうなだれる。

だがこれこそ真のゲーマーであり、パリピの鑑と言っていい。芸人や政治家は「ゲーム」や「パーティー」の本質について、「某ラジオの帝王」に教えを請うべきだ。本気で。

そうすれば、五十も半ばを越えてから「やっと売れだした」と公共の電波で吹聴するようなちっちゃい人間になれる。これこそ芸人の鑑だ。

なぜなら「某ラジオの帝王」は、常にアップデートされる事象をインプットし続けた結果、自分から後輩を飲み会や遊びに誘うこともできず、もちろん女遊びなんてご法度、

その代わり新しい笑いを手に入れ、おかげでやっと思れ出したからだ。

逆に松本は、常にアップデートされる事象をインプットしなかったせいで、新しい笑いを手に入れることができず、さらにハラスメントを告発された。

もちろん俺やUは、後輩に無理矢理飲み会をセッティングさせたり、さらに女性をアテンドさせたり、そのうえ女性と性行為したりセクハラしてこなかった。でしょ？

だって俺が後輩や女性の立場だったら、表面上は笑いながら、絶対に証拠を保存して後で復讐するから。その姿が簡単に想像できるから、俺はそんなことはしないし、やったら夜眠れなくなるくらい後悔する。

やりたくもないことをさせられた後輩から恨まれ、したくもないことをさせられた女性からいつか復讐される未来を想像することは、他人の心の中を想像してそこにある要素をズラして笑いを生み出すことと、完全に直結している。

他人の心を想像できず、他人に恨まれても気付かず、告発されても古い笑い一つとれない。

全部つながってる話だ。

「某ラジオの帝王」がそのリスクをどう回避しているか、全芸人は今こそ、本気で見習った方がいい。

でも、松本がこうなったのは、全部佐久間さんの責任だよ。

松本がテレビの対談で「俺の悪いところ言って」と要求して、某MCは「性の抑制」と言い切ったのに、佐久間さんは「筋肉が怖いしキモイから、筋トレやめて笑いの勉強した方がいいですよ」と言わなかったからだ。佐久間さんが悪い。

でも、そりゃそうだろう。本音のダメ出しなんてカメラの前で言えるワケない。撮影が止まる。

せいぜい、ちょっと芯を食いつつも急所は外しつつさらに相手を喜ばせるおべんちゃら含むペロ出しでごまかすしかないし、佐久間さんはそういうのめっちゃ得意だし、もちろん松本もそれを求めていた。

カメラの前で大魔王が平民相手にダメ出しを要求すること自体、ハラスメントの構造だということに、松本どころか国民全体ほとんど気づいてない。

本気でダメ出しを聞きたいなら、中田のようにカメラが回ってないところで、お願いだから本音を言ってくれ、刺さるヤツくれって、何回も何回も頼まなきゃ。

そしたら佐久間さんだって、「後輩に飲み会セッティングさせるの、いろいろ恨まれるからやめた方がいいっすよ。あと、MHKは本当につまんなかったけど、それ言ってくれる人が周りにいなかったから、KOCの会'23でもやらかしたんですよね？ 芸人みんな付度して笑顔が引きつってるのオンエアされてたっす。カメラ前で俺にダメ出しくれとか甘いこと言ってないで、松本面白くないよってブレーン10人くらいつけて、真剣に生き方見直した方がいいっすよ」って言うよ。ね？

だって佐久間さんが中田にちゃんとダメ出ししたおかげで、この年末年始、オリラジは

山田孝之と楽しくもスリリングな対談動画を更新してる。一方松本は、山田孝之怖ってビビってる。

だから松本がこうなったのはやっぱ佐久間さんのせいだけど、でも本気のダメ出しを求めなかった松本は結局、ダメ出しクレクレ詐欺師でしかない。

確かに寿司を潰す女とかは、ホラーとかアニメとか、全く別の表現をできる監督に任せたら、違った表現になったかもしれないけど、もう今更って感じもする。

ついでだから佐久間さんにダメ出しするけど、年始の『マジ歌』はまあまあだった。せっかく牛乳を口に含む審査を解禁したのに、「吹いたら歌が止まるから笑いたくないけど笑っちゃう」ってジレンマがなかった。だったら牛乳なしのほうがいい。せっかくの牛乳なんだから、二度手間の時間と金かけても、全審査員が牛乳吹いたら終了って初心にかえった方がいい。その無駄な手間が面白いんだよ、佐久間さん。

ただ、ケンゼンコブラの「抜きゃいいじゃん」は、まさに今の歌だった。秋山は週刊誌と繋がってて、全部わかっててあれ歌ったんだと妄想したら最高に面白い。

この国の文化が幼稚なのは、好きなら妄信しなきゃいけないと思ひ込む有害な信者が多すぎるからだ。好きだからこそ妄信しないのが健全なファンだ。妄信したけりゃお笑いじゃなくてイワシの頭でも拝めばいい。

本来宗教から最も遠く、宗教さえも笑うのが芸人のはずだ。芸人が教祖になるって、とんだお笑い草生える。

こっからまとめに入っていくけど、とりあえずあの対談番組はタイトルもダサいから、「中居&石橋のトーク番組・とくぼん」に変更すればいいよ。局違うけど。二回に一回野球選手を呼んでくれば、10年は続くはず。

あと今回ずっと使ってる「松本がこうなった」って言葉の定義は、「週刊誌に告発された」って意味だから。それ以上の事実は知らないし俺は全く興味ない。だいたい、週刊誌記者も告発女性も松本も俺にとっては全く知らん奴で、同じくらい信用できない。

よく知らん奴を妄信したり誹謗中傷する前に、己が無知の知を自覚して、自分の定規の目盛りが狂ってることに早く気づいた方がいい。

この国の文化を進歩させたくて、震災や戦争や福島の子どもの甲状腺を手術した子どもたちへの補償のほうが大事だと思って、今回書いてる。

ろくに勉強してないお笑いがしたり顔で時事問題を語り、出馬すれば当選間違いなしの時代だ。たかがお笑いとかバカにしてたら、無知の知さえ理解できない文化に呑み込まれて国が減ぶよ。

だいたい、『すずめの戸締り』もやっぱ酷かったし。震災をエンタメにして儲けた金はちゃんと寄付されてんのかね。少子高齢化を戸締りするって監督のコメントも読んでけど、だったら高齢者を合法的に殺す社会を映画にすればよかったです。戸締り全然関

係ない。

吐き気がするほどご都合主義なのはハナから諦めてたけど、亡くなった人たちの声を聞く行為は、むしろ戸を開ける行為だ。戸を開けて声を聞いてそれを社会全体に広めていく。

それがごく当然なのに、声を聞くだけ聞いたらパタンって閉めてどうする。お前だけ何か知った気になって、あとは臭い物に蓋か。

いっそ『すずめの虫払い』にして、もう一回撮り直せ。ああいう映画をありがたがるからこの国の文化がどんどん幼稚化する。

ちなみに、年末年始観た漫才では、『検索ちゃん』でハライチがやった「オンラインストアをアナログ化する」ってネタが一番面白かった。M-1のさや香ばりに観客を置いてきぼりにしかけたけどそれはわざとで、「郵便番号まで書いたら、番地の前まで店員が記入するサービス」とか、「お客様、ロボットですか？」って問いとか、ハライチ節を封印した発想重視の、再現性の高いネタだった。ああいうのがアップデートされた笑いなんだよ。

とはいえ、Uが松本応援側なのはすでに聞いているから、Uからの返信が被害者に対して酷すぎたら載せないかもしれない。その時はゴメンって、先に謝っとくね。

最後の伏線回収だけど、今回のウマシカを物語にすることも考えたけど、時間もかかるし、物語って読み進める推進力にはなるけど、あんまり覚えてないことも多いよ。とはいえ、俺が今回書いたのでUが覚えたのは、「トカゲのおっさんが泣くところ」って部分だね。書いてないけど。

昭和のオカン以上に、今回はかなり強い言葉でおせっ介介入して断言したけど、これは絶対に松本の遺書の影響だよ。俺も松本チルドレンだからね。松本チルドレンなら、松本の遺書以下の戯言は書けないよ。松本だって、自分だけ放言を許して、他人の暴言は否定するほど器は小さくないよ。

松本の影響を受けた芸人たちの言葉が薄っぺらすぎて、お前ら本当は松本のこと嫌いだろうって思う。本当に松本を好きなら、「どうした松本そんなもんか！」って、千尋の谷から這い上がる松本の顔に唾吐いて蹴り落とすくらいのはするよ。それが松本のマッチョイズムでしょ？

だからお前ら全員勘違いしてるよ。何も知らん無知の知のウマシカに言われて、情けないと思わないの？

今回『すずめ〜』はとぼっちりだけど、でもテーマが震災だから仕方ない。

あと、松本の企画で成功している物もたくさんあるけど、俺にとっては「もらえる笑いの量よりも鼻につく回数の方が多い」（某福岡芸人のパクリ）から観る気にならない。

M-1も毎年、録画したのを審査部分は全スキップで観てるし。

想像力とインプットという観点から、松本の笑いが古い理由はもう証明したし、古い文化にかまけている時間をもったいない。

これでほぼ全部の伏線が回収できたかな。

今回はこんな感じ。次回こそ、人生を豊かにする作品について書きたいな。

どうかな？



第八十二回『台北プライベートアイ』と「松本がこうなった」 理由～U から G へ～

今回の件では松ちゃんを応援してるし、裁判に集中するのはやむを得ないベストな選択だと思ってるよ。吉本は松本不利と思ってるかもしれないけど。

世の中の流れとして、合意あるとか無いとかの証拠が不十分なのに冤罪で痴漢になった例も全くないワケではないだろうし、不当な男性性欲の魔女狩りみたいなのが感じていたから、それに少しでも変化を起こしてくれればいいなと思ってる。

もちろん、松本が正当に告発されたのか、不当に告発されたのかはわかんないから、擁護じゃなくて応援してるだけだけどね。



考えるウマシカ～第八十二回 『台北プライベートアイ』と「松本がこうなった」理由～

著 弦楽器イルカ

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
